

平成 25 年 4 月号

メンバー、ボランティア、学生
みんな仲間!

けやきと仲間 めーる



こころの病と闘っている人々と千葉大学生や周囲地域との協働の会 地域活動支援センター「けやきと仲間」

平成 25 年 4 月 1 日(第 96 号)



3 月 25 日、ちょっと良いことがあった日に けやきんちの前で

撮影:小野澤 有羽

第 15 回スプリングフェスティバル

3月3日(日)、ハーモニープラザで千家連主催のスプリングフェスティバルが開催され、けやきと仲間も「ウクレレ・ギター+歌、マリンバの演奏」「手芸品等の販売」で参加しました。

前日から大勢のメンバーや関係者が、事前準備や本番、後片付けに協力し、楽しいひと時を過ごすことができました。



川
柳

(スプリングフェスティバル司会者より)

春祭り今年もまたぞ千家連

前の日の会場作り大変だ

新顔を待って4年だ司会業

慣れたかなマイクさばきが右上がり

インタビュードキドキするのボクもです

あの子見てまた来年も会えるかな

バスハイクの実行委員しました

3月7日にバスハイクでお台場行ってきました。

前日はパンフレットを作りましたが、疲れて立ちくらみで倒れそうになりましたが、当日はお天気にも恵まれルンルン気分でした。集合30分前に千葉駅北口に来て、迷っているメンバーがいないか確認するために西口まで行きました。

お台場はバスで一時間半くらいのところで、道も空いていて無事につきました。

まずガンダム関係のビルに入りました。うまそうなお好み焼きもあったのですが、僕はまず弁当を食べて、食べたりなかったら注文しようと思い、結局ほかのメンバーに付き合っただけでアイスcreamを食べました。

次にフジテレビに入りました。可愛い女の子がいっぱいいました。

最初 25 階に行きました。展望台がありました。200 円払えば双眼鏡使えましたが我慢しました。次に 24 階に行きました。アンジェラアキやいきものがかりや前田敦子などの色紙が飾ってありました（全部女性じゃないですか！）。最後に 7 階に行き、行けなかったメンバーへのお土産を買いました。

その後、科学未来館に行き、磁石を使った伝導の実験、電気抵抗の説明、インターネットの図解といったものを見ました。僕が分かったのは 0 と 1 のデジタル伝達で二進法の考え方でしたが、白と黒のボール、え？オセロでも囲碁でもないですよ、要するに二種類の組み合わせで情報を伝える方法でした。

さらに VENUS 何とかという建物にも行きましたが、そろそろ時間になり帰ることにしました。急いでいたら、僕は体調が悪くなり、幻聴が聞こえてきて大変でした。

帰りの道も空いていて、予定よりだいぶ早く帰りつきました。

今回はハラハラドキドキでした。病気や失敗、失礼や行き届かぬこともいっぱいありました。でも楽しかったです。色々な方の支えがあって、無事終了できて良かったです。

中村一博



池田さんを偲んで

2月28日は、三年前に逝去された池田三友紀さんのご命日でした。故人を偲び、現地の教会にささやかながらお花を手向けさせて頂きました。



風に桜の花びらが舞う。まるでハラハラ涙が流れる様に

(続 そううつ障害との戦い)

先月号の糸日谷さんのエッセイ「そううつ障害」について、何人かの方から感想を頂きました。

○糸日谷さんの記事、非常に心が打たれました。次回の「続」が待たれます。 —Nさん

○糸日谷さんの「そううつ障害との戦い」を読み、つらく孤独な毎日をおくられて、可哀相で涙が出ました。

今は元気で過ごされていることを願うばかりです。 —Sさん

○糸日谷さんの「続」を早く読みたいです。 —Kさん

今月号では「続」を掲載させていただきます。

57才。だれも見えない所で、切れた中年男

自分の明日への可能性が信じられなくなっていました。切れました。

へトヘト、もうろうだった私が夜遊びを始めました。人間は面白いもので、本能のおもむくままに退廃の世界に入る時は変に力が残っているものです。1~2カ月新宿の〇〇〇町に通った。20万円くらい使い切ってお金がなくなり行けなくなりました。この町はお金のない人間にはごみとやくざの町だった。

あいかわらず毎日寝ていた。体が地球の中心に強く吸い付けられる様にへばりついていました。寝ている以外に、周期的に来る「そう」はつらかった。1日じゅう「いらいら」と「うろうろ」でたまらなかった。

1~2年たつと夕方なんとか起きられる様になりました。

傷だらけの私にも、その原点「生きた証・子供との34年」から新しい道の扉が開かれるか

夕方3~4時ころから起きられる日が出てきました。

体の調子はすごく悪かった。夕方生まれた力をなんとか意欲にむすびつけられないかと思い、結論は長い教員生活で助けることができず、忘れることのできない子供の事への思いでした。なんとか作品にできないか、そうだ絵本にしよう。夕方机に向い描き始めました。

調子の良い日、夕方、出版社を捜しながらぶん回りました。そこで私はすばらしい人に出会えたのです。福音館に行った時です。偶然、編集長に会ったのです。なりふりかまわず自分が障害者であること、今この絵本の出版に自分のすべてをかけている事を訴えました。それを聞いた彼は、すごく忙しいけど夕方5時30分に持って来れば見てあげるよと笑いながら言ってくれたのです。帰りに、嬉しくて、涙を流しながら大酒を飲んでしまいました。

その後1日2時間ぐらい、それも体調のよい日と描ける日は大きく限られていましたが、次から次へと去って行った子供たちへの思いが出てきて20作ぐらい作りましたが、1冊も出版にはいたりませんでした。しかし、その編集長との出会いは、寝たきりの毎日から立ちあがる大切な一歩になりました。

(続く)

糸日谷 敬一

糸日谷さんの戦いは、これで終わることなく更に続きます……。

来月号では「完結編」を掲載させていただく予定です。